



■ 「米騒動」

この夏は全国で米が品薄となり、店頭から米が消える「令和の米騒動」と呼ばれる現象が起きました。「令和の米騒動」は、今年の流行語大賞の候補にまでなりました。米騒動と呼ばれる現象は歴史上何回かあるでしょうが、もっとも有名なのは第一次世界大戦後の1918（大正7）年に起きたものです。当時、米の価格は約3倍にまで跳ね上がり社会不安が増大しました。

米の消費量は年々減少してきているものの「令和の米騒動」という言葉を耳にすると、米はまだまだ主食として重要な地位にあるということを実感しました。

ところで大正時代だけでなく、昭和にも米騒動があったのをご存じでしょうか？唐突ですが、次の問題を解いてみてください。

【1】 4点A(1,3), B(5,8), C(0,0), D(12,0)がある。線分AB上の動点Pと線分CD上の動点Qに対し、線分PQの中点をSとする。このとき点Sの存在する範囲は、4点

$$K\left(\frac{5}{2}, \text{アイ}\right), L\left(\frac{1}{2}, \frac{\text{ウエ}}{\text{オ}}\right), M\left(\frac{\text{カキ}}{\text{ク}}, \frac{3}{2}\right), N\left(\frac{\text{ケコ}}{\text{サ}}, 4\right)$$

を頂点とする四角形の周および内部である。そして四角形KLMNの面積は シス である。

【注】問題中のア～スには、「-, ±, 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, * (該当なし)」のいずれかが入ります。

いかがでしょうか？この問題は、1985（昭和60）年実施の共通一次試験（現在の大学入学共通テスト）「数学I」（本試験）です。当時も解答はマーク式でしたので、ア～スには符号・数字・記号をマークしていくわけですが、ここで受験生を困惑させる出来事が起きました。前年まで選択することがなかった「*」（該当なし）が最初の問題から登場したのです。該当年の共通一次試験を経験した方にお話を伺うと、会場のあちこちから「えっ」「えー」という声が聞こえてきたとのことでした。当時は、「*」を選択=誤答で、自身の計算間違いか勘違いを疑いなさいといった感じでしたから、受験生の多くは何度も何度も計算をやり直したことと思います。結局この年の「数学I」には21か所で「*」の選択があり、「*」を米印に見立てて、のちに「昭和の米騒動」と呼ばれることとなりました。

「受験問題は簡単だ。必ず正解があるから。実社会に出たら正解がないことだってある。」という人がいます。ただ、「正解がある」受験問題であっても「アイ」には必ず2桁の数字が入るはずと思い込んでいて、自分の出した答えが不正解ではないかと思い、何度も何度も考え直すこととなり、なかなか正解にはたどり着けません。しかし、この思い込みの部分を柔軟に考えることができれば、案外簡単に正解にたどり着けることもあります。

【「アイ」≠2桁】を、実社会での「既成概念」に置き換えて考えてみると、日常生活においても新しい局面が展開できるかもしれませんね。

【問題の解答】

アイ 4* ウエ 3* オ 2 カキ 13 ク 2 ケコ 17 サ 2 シス 15

【注】「共通一次試験」(正式名称は「大学共通第1次学力試験」)とは、1979～1989年までの11年間にわたり実施された基礎学力試験。1990年からは「大学入試センター試験」(正式名称は「大学入学者選抜大学入試センター試験」)、2021年からは「大学入学共通テスト」(正式名称は「〇年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト」)と名称が変更(実施科目・配点等も)されました。ちなみに選択記号「*」は、「大学入試センター試験」への移行を機に廃止されています。